

## 文法（史的研究―古代）

山口 仲美

### 一、はじめに

ここで「古代」として取り扱う時代の下限は、鎌倉時代までとする。ただし、古代語の崩壊過程を問題とする論者は、たとえば時代が鎌倉以後に及んでいても、採り上げることにした。

今期の特徴としては、現代語の文法研究の観点から、古代語にも着実に浸透してきていることをあげることが出来る。古代語における動詞や助動詞をテンスやアスペクトなどの観点から追究して行く研究の少なからぬ出現は、その一例である。また、そうした新しい言語学的な観点から「文法史」を試みる企画があったことも、その一例である。すなわち、『講座日本語2・文法史』明治書院、昭57・4）は、たとえば「動詞性述語の史的展開」として、相・態・時・叙法といった側面から文法現象を採り上げ、その史的展開を解明しようとする試みであった。

新しい波が古代語の文法研究にもひたひたと押し寄せているのを感じながら、以下具体的に展望を試みることにする。雑誌論文を中心にして、用言・助動詞・助詞、句論・文論、敬語、その他の順で述べて行く。ただし、こうした従来の品詞論的な見出し語の立て方

では、新しい文法研究は納まりきらない。止むを得ず、新しい文法研究は、これら見出し語の中で比較的近い項目に割り込ませるといった形で記述して行くことにする。なお、敬称はすべて省略させていただきます。また、採り上げた今期の論文・著書には通し番号をつけて、通読の便宜を計った。

### 二、用言

まず、動詞の活用にかかわる論を採り上げる。

大野晋に始まり、阪倉篤義、馬淵和夫らによって進展させられた活用の起源に関する論は、この二年間においては意外に少なかった。

①久島茂「動詞連体形の成立」(『静岡大学教育学部研究報告・人文社会科学篇』32、昭57・3)は、動詞の連体形が終止形から成立してきたことを論証したものであるが、連体形のみならず、動詞活用全体の成立にも言及している。示唆することの多い好論であるが、

いささか論証を急ぎ過ぎてしまった感がある。たとえば、終止形成立の際に付着させる $wi$ や二段型活用の連体形已然形の成立の際に介入させる $r$ の性質など、十分に説明される必要がある。なお、動詞活用の起源に関する従来説を簡潔にまとめたものとして、②春日

和男「動詞の活用形式はどうして生まれたか」(『国文学』27の16、昭57・12)がある。歴史以前の動詞活用の起源を尋ねることは重要な研究課題の一つであるが、結局は推測に推測を重ねて行く以外に方法がなく、従って、ここでは提出された仮説が、どの程度の論理的整合性をもつかによってのみ、仮説の有効性が決定されることになるであろう。

次に、広く動詞の活用に関する論を幾つか挙げてみる。③川端善明「動詞の行—或る動詞への条件—」(『古典学藻』塙書房、昭57・11)は、多くの含蓄に富む考えが盛り込まれているが、本稿の特色は、助動詞の成立を動詞の活用形式との相補的關係によって説明しようとしたところにある。たとえば、助動詞「ツ」は、タ行下二段型活用であるが、タ行に活用する動詞は殆ど四段であり、下二段型活用はブランクである。それは助動詞へ譲歩された形でのブランクなのであり、ここに助動詞成立の条件を見る。すなわち、助動詞の活用形式と動詞の活用形式とを同行における相補の關係と捉えるわけで、きわめて魅力的な説である。川端は、自立語が形式化して助動詞になって行くといった従来の考え方とは違つて、語幹から遊離しやすい動詞性接尾語がやがて助動詞になって行くという過程を考えており、本稿もその延長上にあるものと理解される。④山口佳紀「活用形式の変異から見た動詞語彙の一考察」(『国語語彙史の研究』3、昭57・5)は、たとえば他動詞「カナシブ」の語には上二段と四段との両活用形式が存在するが、このような活用形式に変異を生じている動詞を収集し、そこに見られる傾向性を追究したものである。動詞活用の成立展開にかかわる指摘を含む。⑤阿部健二「上二段活用所属動詞群の史的傾向—古代語上二段から近代語上二段への展開を通

して—」(『国語語彙史の研究』4、昭58・5)は、上二段活用所属動詞群の性質を明らかにし、その歴史的推移の様相を素描しようとしたものである。上二段所属動詞の性質として、自動詞的で靜的、そしてサ行四段他動詞と対応することが多いといった特色を指摘している。活用形式と所属語彙の性質との間に何らかの対応の見られることは、既に⑥竹内美智子「和語の性格と特色」(『日本語の語彙の特色』明治書院、昭57・1)でも言及されている。こうした研究の機が熟してきたであろう。なお、阿部は、右の論考を最後に他界した。事故死である。享年三十九才であった。「やりたい研究が一杯あって」と語っていた阿部のことはが耳に残る。心より御冥福を祈り上げる。⑦山内洋一郎「下一段動詞『蹴る』について」(『国語学史論叢』笠間書院、昭57・9)は、「蹴る」の語が、江戸時代の国学者達にどのように扱われてきたかを詳述し、さらに院政鎌倉期の「蹴る」の用例を網羅分析し、通史的解釈を試みたものである。下一段活用に属する唯一の動詞「蹴る」の問題点を的確に抉り出しており、興味深い論考であった。

形容詞に関する論としては、⑧東郷吉男「平安時代における重複型語幹の形容詞について—かな系文学作品の用例を中心に—」(『国語学』130、昭57・9)がある。平安時代の重複型語幹の形容詞(例、おとなおとなし)について、その成立過程・活用の形式・語性などを説き明かしたものである。東郷は、重複型語幹の形容詞が情意性をもつのは、同一語基の重複に基因するのではなく、シを伴ってシク活用形容詞となることによって生じたと考ええる。しかし、橋本四郎らのように、シは情意的要素ではなく、語幹に安定性を与える要素であったと考える立場からは反論も出さうである。なお、東郷は、⑨

「平安時代の重複形容詞索引」(『大阪薫英女子短期大学研究報告』17、昭57・12)も出している。便利である。

形容動詞に関する論としては、⑩鈴木泰「タリ活用形容動詞の通時的変化傾向とその要因」(『武蔵大学人文学会雑誌』13の4、昭57・3)がある。タリ活用形容動詞(＝漢語オノマトペ。例、堂々たり)の史的な変化傾向を明らかにし、その原因追究を行ったものである。従来等閑に付されていた漢語オノマトペに焦点をあて、構文上の役割からメスを入れており、注目される論考であった。なお、鈴木は、⑪「漢語ナリ活用形容動詞の史的性格について」(『副用語の研究』明治書院、昭58・10)、⑫「中古における評価性の連用修飾について」(『日本語学』2の3、昭58・3)を合わせ執筆しており、形容動詞について精力的に研究をおすすめている。

### 三、助動詞・助詞

さて、品詞論的にみれば用言と助動詞との両方にかかわるのであるが、ここで新しい文法研究の幾つかを採り上げることとする。

まず、ヴォイスに関する論としては、⑬奥津敬一郎「何故受身か？

——<sup>グロイイス</sup>視点からのケース・スタディ——」(『国語学』132、昭58・3)がある。

奥津は、従来言われてきた非情の受身非固有説・被害の受身古来説を否定し、次に枕草子・徒然草の用例をもとに、「視点(＝話し手の関心の中心)」の原理を応用し、古典の受身文を説明している。非情の受身非固有説・被害の受身古来説については、既に原田信一らによっても否定されており、この論の見所は、むしろ視点の原理応用の部分にある。現代文法の観点を古典語に導入してきた論として注目に値する。なお、⑭後藤和彦「動詞性述語の史的展開(1)相」

(『講座日本語学2・文法史』明治書院、昭57・4)も、ヴォイスにかかわりの深い助動詞を採り上げ、その表現構造ならびに史的展開を概説している。ただ、敬意を表す「す」や継続を表す「ふ」まで採り上げられており、ヴォイスとは何かという規定を示す必要があったらう。

アスペクト・テンス・ムードに関する論を、以下に採り上げて行

く。⑮金水敏「上代・中古のキルとヨリ——状態化形式の推移——」(『国語学』134、昭58・9)は、阪倉篤義論文を基礎としながらも、キルとヨリの意味関係を、アスペクトの観点から捉え直した意欲的な論考である。上代では、ヨリがキルの唯一の状態化形式として機能していたが、やがて十世紀中頃になると、キルの状態化形式の主流がキタリ・キタマヘリに推移して行くさまを手堅く実証しており、説得力がある。古代語のアスペクト体系の解明に、一つの有力な手掛かりを与えてくれる。⑯山口明穂「源氏物語の語法」(『武蔵野文学』30、昭57・11)は、時の助動詞を付さない動詞単独の表現例、「初夜おこなふほど」の「おこなふ」の意味を論じており、テンス・アスペクトの問題に示唆するところのある論考であった。関係論文として、⑰工藤力男「連体用法『た』の解釈——アスペクト試論——」(『岐阜大学国語国文学』16、昭58・1)も副象に残った。現代語中心ではあるが、古典語とのかかわりもふまえ、連体用法「た」の意味を説き明かしている。また、やや毛色が異なるが、⑱坂本信男「道綱母『嘆きつ』、詠歌の受容——解釈と再検討——」(『立教大学日本文学』49、昭57・12)も、「おそく＋テンス(動詞)」の表現形式を取り扱っており、古典語のアスペクト・テンスの解明に有益である。⑲斎藤博「日本語動詞のテンスとアスペクト(3)」(『東京成徳短期大

学紀要』16、昭58・3)は、助動詞「ぬ」「つ」が如何なる性質の動詞と結びつくかを明らかにしたものである。また、②北原保雄「動詞性述語の史的展開(3) 叙法」(『講座日本語学2・文法史』明治書院、昭57・4)は、ムードに関する否定表現・推量表現の変遷を説いたものである。推量の助動詞の消滅交替理由、活用形の減少原因などが追究されていて興味深い。なお、否定表現は、北原自身の文法論ではムードに関するものではなく、むしろコトに関するわけだが、寺村秀夫によれば、現代語の否定表現にはコトに属するものとムードに属するものとの二種類があるという。古典語ではどうなのか追究してみたい問題である。

次に、いわゆる助動詞に関する論を幾つか採り上げる。②鈴木義和「助動詞『む』に原因推量の用法は認められるか——上代語における考察——」(『国文論叢』10、昭58・3)は、助動詞「む」に原因推量の用法を認める見解に対して、「む」にかかる用法は認められないことを論証したものである。論の進め方にやや強引さの見られるのが残念であるが、一つの主張を持ち、それに従って根拠を提示し論理を展開している好論と言えよう。また、②桜井光昭「今昔物語集に見るダの源流をめぐって」(『国語学』131、昭57・12)は、現代の断定の意を表す助動詞「だ」の源流は、今昔物語集に見られる感覚的に現象を認識判断する「ニテアリ」に求められると述べている。長年今昔の言語研究に携わってきた桜井ならではの発言であり、傾聴に値する。ただ、現代語の「だ」は、独断的で決め付けるような強い調子があるが、今昔の「ニテアリ」のニュアンスと果して連続的に捉えられるのか、更に検討を要するところであろう。なお、比況の表現形式の成立にかかわる③山口佳紀「ゴト(如)の意味——比況

へ「ゴト」の成立——」(『国語国文』51の10、昭57・10)もあった。

次に、助詞に関する論をとりあげる。関係文は、余り多くなかったが、格と動詞の問題を扱ったものが目立った。②夏井邦男「格助詞『より』考——列挙の用法の消長について——」(『国語研究』45、昭57・2)は、列挙の意を表す「し」を始めて」と「しより始めて」との間に見られる史的交替の様相を実態調査によって明らかにしたものである。夏井には、⑤「比較表現についての史的考察(上)(下)」(『人文論究』42・43、昭57・3、昭58・3)もある。また、②川村幸次郎「波々乎和加例三」をめぐって——助詞機能の変遷考——」(『解釈』28の7、昭57・7)は、「母を別れて」が「母に別れて」に変わって行く過程を述べたものである。こうした格と動詞の関係の移り変わりを問題とする場合、その推移を裏付ける必然性の説明が欲しい。その他、②北原美紗子「助詞と助動詞のかかわりかたについて(その二)」(『清泉女子大学紀要』30、昭57・12)をはじめ、いくつかの著実な論考があった。

#### 四、句論・文論

係り結びにかかわる論としては、②尾上圭介「文の基本構成・史的展開」(『講座日本語学2・文法史』明治書院、昭57・4)、②北原保雄「係り結びはなぜ消滅したか」(『国文学』27の16、昭57・12)があった。②尾上は、文の基本構成を、係り結びの断続関係と論理的格関係との二面の緊張関係と捉える。そして文の歴史を、係り結びの断続関係が前面に出ていた時代から論理的格関係が表現上の優位に立つ時代への展開と考える。従って、係り結びの消滅過程が重要なテーマの一環として詳述されている。尾上は、係り結びの衰退

を連体終止法の一一般化との関係で説く。すなわち係助詞と結びの連体形とのペアで言い表わしていた特有の感覚が、文末の連体形だけでも伝わるようになったため、係り結びが衰退していったと見る。こうした尾上説に対して、部分的には共通の認識が認められるけれども、やはり別個の説明原理で、係り結びの消滅過程に照明をあてるのが、⑳の北原論文である。北原は、係り結びの消滅の理由を、プロミネンスによる代替と係りの文末にかかって行く力の消滅という二つの面から説明する。プロミネンスといった新しい観点を導入しての説明、係りの力の消失といった従来説の盲点を突く観点からの説明は、新鮮で目を見張る思いがする。ただ、北原も、係りの、結びと呼応する力の消失の原因は、文末がそれに代わり得る力を持ってきたからだと考えられているらしく、ここに尾上説と共通の認識を見てもよいかもしれない。これら二論文は、係り結びの消滅に関して考えさせることの多い斬新な論であった。

また、「ズハ」の語法については、次のような論考があった。⑳ 米山敬子「上代のずは」(『甲南大学紀要・文学編』48、昭58・3)、㉑ 大野晋「万葉集のズハの解釈——助詞への機能から見る。——」(『解釈と鑑賞』48の14、昭58・11)、㉒ 西宮一民「上代の所謂『ズハ』の意味」(『皇学館大学紀要』20、昭57・1)、㉓ 宮田和一郎「解釈と文法」(『解釈』29の7、昭58・7)、㉔ 宮地幸一「ずは・なくは考(句・穴)——鎌倉時代資料の考察」(『帝京大学文学部紀要・国語国文学』14・15、昭57・10、昭58・10)。㉕と㉖は、ともに上代の「ズハ」の用法を全体的に把握しようとしたもので、論旨に密接な関係が認められる。ただ、㉗ 米山論文は、やや解りにくい面があるのに対し、大野論文は、きわめて明解に整理されており、理解しやすい。

大野は、万葉集に見られる「ズハ」を、「ズ」の上に来る事態の意味内審によって三種に分類し、それを「ハ」で承けて下にその解答を述べるといふ形式とみれば、いかなる場合も解釈できるといふ。「ズ」に上接する事柄に注目して、三通りに分類したのは卓見である。周知のごとく、上代の「ズハ」については、既に多くの論考が出されているが、たとえば山口堯一(『古代接続法の研究』明治書院、昭55)は、「ハ」を仮定表現を表す接続助詞とみて統一の説明を与えているが、大野は、口語訳から推すと「ハ」を係助詞と解するようである。係助詞とすると、「ハ」の上接表現と下接表現とは如何なる構文的関係にあると考えるべきであろうか、今後の論考が期待される。

その他、句論・文論関係の論としては、㉘ 城田俊「文と語構成——二重不定格と複合語——」(『国語国文』52の7、昭58・7)がある。古代語における二重不定格文(Ⅱ)かは「妻呼ぶ」のように、格表示のない場合が二箇所ある文)をとりあげ、その意味の曖昧性を回避する方法として二つの場合を考える。一つは複合語を作り不定格の一つを消去する語構成的手段、他の一つは格助詞によって従属法的構文を明示する手段である。こうして感性的把握になる古代日本語文が、論理的把握になる現代文へと展開してきたことを述べる。日本語文のダイナミックな展開を鮮明に描き出しており説得力がある。特に二重不定格文と複合語とを関連づけて捉えた点は新鮮である。㉙ 長谷川政次「否定問いかけに対する応答の仕方——説話・軍記物語・謡曲・キリシタン資料について——」(『和洋国文研究』18、昭57・12)は、否定問いかけに対する応答の仕方を平安末期から室町時代の文献にあたって実態調査をしたものだが、幾つかの興味深い事実が報

告されている。⑳山口堯二「疑問表現の方式と形態」(『研究集録・人文社会科学』31、昭58・1)は、疑問表現の方式と形態を、汎論的に網羅しており、今後の研究に資すること大であらう。

## 五、敬 語

敬語に関する論文は、かなり多く見られたけれども、紙量の制約上、何らかの問題提起の意味の感じられる論文にしぼってとりあげる。㉑奥村悦三「事実と解釈」(『国語国文』52の2、昭58・2)は、自敬表現を中心に、ある表現が真に意味することとは一体何なのかといったことを思惟した論である。奥村は、残存する事例を収集し、それらを統一的に説明しようように作りあげられた解釈に、根本的な疑問を投げかける。しかしまた、言語主体の伝えようとした意味に迫り得る解釈として、それよりはましな、文脈全体の構造の分析から割り出された解釈にも懐疑する。では、意味とは果してどういうものなのかと奥村は苦悩する。従来の研究のあり方に反省を強いる頂門の一針である。

また、現在定説化し始めている素材と素材との関係規定の敬語(いわゆる謙讓語)について、再修正を行う論も出された。㉒根来司「源氏物語の敬語法——素材と素材との関係規定の意味するもの——」(『国語語彙史の研究』4、昭58・5)、㉓同「源氏物語の敬語法——自身の方法——」(『中古文学』31、昭58・5)である。根来は、昭和三十八年「敬語の分類」(『言語と文芸』5の2)で、「見奉る」の「奉る」、「思ひ聞ゆ」の「聞ゆ」は、時枝誠記の言うような話題の人物相互の身分関係の表現ではなく、話し手の、話題の人物への敬意であるという説を出した。この考え方は、玉上琢彌・森野宗明らの説と相

俟って現在一般に認められてきている。ところが、根来は、㉑㉒の二論文で、「奉る」「聞ゆ」は、時枝説の通りで、話題の人物相互の身分関係を示すものであると再修正した。根来は、人物相互の身分関係が適合しないように見える用例も、登場人物間に流れる暖い心遣いを想定すれば、すべて説明できるとする。今回の再修正説は、根来特有の物語観に支えられて出てきており、その前提そのものの更なる検討が必要であらう。と同時に、前説を否定する積極的な根拠を提示する必要がある。

なお、敬語に関する論としては、次の三つのもも挙げておきたい。㉔森昇一「接尾語ドモと敬語表現——その異例についての覚書——」(『野州国文学』31・32合併、昭58・3)、㉕阿部八郎「心語文待遇表現の特徴——今昔物語集本朝世俗部の場合——」(『国学院雑誌』83の9、昭57・9)、㉖辻村敏樹「古典の敬語と現代の敬語——表現性の観点から——」(『国文学研究』76、昭57・3)。㉗は、接尾語「ども」に下接しているにもかかわらず、尊敬表現となっている異例な場合をとらあげ、それらは尊敬表現に呼応する総主語のようなものが背後に考えられるためではないかとしている。「ども」については、㉘三上淳子「今昔物語集における接尾語『達』の用法について」(『山口国文』6、昭58・3)でも触れられており、そこでは単に複数を表す働きしかないと考えられる「ども」の例が指摘されている。とすると、㉙森の採り上げる「ども」もその線で解釈することが可能なのかもしれない。㉚は、会話文と心語文における敬語表現のあり方の違いを、今昔物語集世俗部を対象にして解明したものである。会話文と心語文は、言語的に共通する面が少なくないが、こと敬語に限

つては、両者の間に落差がある。阿部は、それを具体的に指摘し、その落差が心理描写に深みを与えていると述べている。会話文と心話文の言語的な異質性は、さらに追究されるべき課題の一つであろう。④は、古典における敬語で、現代語訳しにくい場合を幾つか例示し、古典の敬語は古典の敬語としてなるべくあるがままに受け入れるのが望ましいと主張している。問題提起の意味もさることながら、ある敬語表現が何故生じてくるのかといった原理的考察が、行間に滲み出ており深い味わいがある。なお、今期には、④桜井光昭『敬語論集——古代と現代——』(明治書院、昭58・4)の刊行もあった。既に公表してきた着実な論考の数々を収録したものである。

## 六、おわりに

最後に、今までに採り上げられなかった論考・著書について触れておきたい。

④橋本四郎「指示語の史的展開」(『講座日本語学2・文法史』明治書院、昭57・4)は、「コ」と「ソ」の二元的対立から、「コ」との形態的連帯を欠く「ア」が、「カ」に代わって指示体系に組み入れられて、「コ」「ソ」「ア」の三元的指示体系を作り上げて行く過程を、巧みに描出している。なお、単行本としては、これまでの文法研究の成果を十分に取り入れた④『講義座・文法史』(大修館、昭57・12)の刊行があった。また、個人の論文集としては、④山田巖『院政期言語の研究』(桜楓社、昭57・6)、④北條忠雄『国語文法論叢』明治書院、昭58・9)、④田島光平『語法の論理』(笠間書院、昭57・3)、④布山清吉『侍り』の国語学的研究』(桜楓社、昭57・11)などがあった。

こうして二年間を展望してみると、古代語の文法研究が、現代語の文法研究にみるような理論性・体系性をめざして、音もなくし確実に変質し始めていることに気付く。深い洞察に支えられた論考の続出を願って、この展望を終わることにはしたい。四〇〇字詰原稿用紙十五枚程度という紙数制限の中で、割愛せざるを得なかった論考も少なくない。また逆に、筆者山口の怠慢ゆえに見落としてしまった卓論もあるに違いない。誤読による妄言もあろう。すべて御海容を乞うのみである。

△付記V本展望のための資料収集に際して、国立国語研究所の野村雅昭氏の御厚情にあずかった。篤く御礼申し上げたい。

—— 共立女子短期大学助教授 ——